

1. 学術（情報）コミュニケーションとは

1.1 『図書館情報学用語辞典』第5版<sup>1)</sup>

【学術情報流通 (scholarly communication)】

「研究成果である学術雑誌の論文や記事等の学術情報を研究者のコミュニティで共有するプロセス。学術情報の生産者としての著者は、その利用者としての読者でもあり、著者と読者が同じコミュニティの構成員であることも多い。学術情報流通のメディアは、学会協会誌等の会員誌が担っていた。従来、この会員誌は有料で会費や購読費がかかり、かつ形態は冊子であった。しかし近年になり、学術情報はオープンアクセス、電子ジャーナル、機関リポジトリ、イープリントアーカイブを経由する量が急速に増加し、紙から電子へ、郵送からウェブへ、有料から無料へ移行が始まり、様相が変貌しつつある。」

1.2 “Scholarly Communication Toolkit” (米国大学研究図書館協会 (Association of College and Research Libraries, ACRL))<sup>2)</sup>

(1) 定義

「研究およびその他の学術的著作物 (writings) が創造され、その質が評価され、学術コミュニティに配布され、将来の利用のために保存される制度 (system) のこと。この制度には、査読付き雑誌による出版などのフォーマルコミュニケーションと、メーリングリストなどのインフォーマルコミュニケーションの両方が含まれる。」<sup>3)</sup>

(2) 模式図

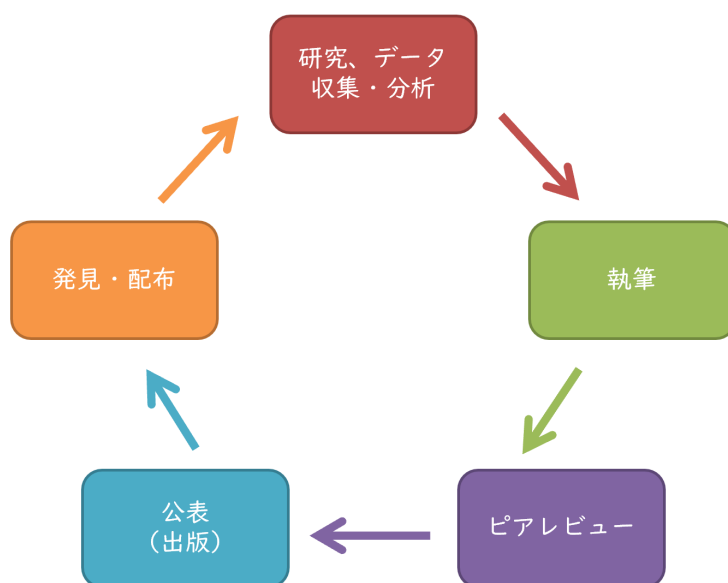


図 “Scholarly Communication Toolkit”のOverviewを参考に著者作成（出典：Association of College and Research Libraries. “Scholarly Communication Toolkit: Scholarly Communication Overview.” 2021-10-22, <https://acrl.libguides.com/scholcomm/toolkit/home>, (accessed 2022-06-16).）

### (3) 多様な関係者

研究者、資金提供者（funder）、ピアレビューアー、出版者、図書館

### (4) 学術コミュニケーションにおける大学図書館の役割

- ・ オープンアクセス（学術研究のオープン化）を戦略的に支援し、従来の学術出版の経済的課題に積極的に対応するコレクション構築方針の採択、およびコレクション構築予算の配分見直し
- ・ 購読誌とオープンアクセス誌の両方の評価を支援するツールやスキーマの開発
- ・ 研究者の識別システムの援助、およびオルトメトリクス利用の促進により、研究者の研究のインパクトを最大化することを通じた研究者への支援
- ・ 図書館による出版プラットフォームの開発およびホスティング
- ・ 研究および教育における資料の保存、アクセス、利用、および発見を促すためのフェアユース権の活用、およびその活用を促す他者への主体的な働きかけ
- ・ 知的財産権に関する研究者への教育、および出版契約の解釈と修正に関する支援
- ・ 学術研究のオープンアクセスに向けたアドボカシー
- ・ 資金提供者のパブリックアクセス義務遵守の円滑化
- ・ 研究機関の研究成果の収集、発表、発見の最大化に資する機関リポジトリの開発と運用

### (5) “Scholarly Communication Toolkit”の目次

- ・ 概要
- ・ ニュース
- ・ 学術出版
  - 出版の経済的側面、学術雑誌の評価、研究の評価方法、図書館による出版プログラム
- ・ 著作権
  - フェアユース、著者の権利
- ・ 研究成果の利用
  - オープンアクセス方針および出版、公開利用および資金提供者（funder）による義務化、ACRLの方針書
- ・ リポジトリ
- ・ 研究データ管理
- ・ 関連する話題
- ・ Toolkitについて

### 1.3 *Scholarly Communication: What Everyone Needs to Know* (2018)<sup>4)</sup>

#### (1) 定義

##### 1章 定義と歴史

「学術コミュニケーションとは、研究成果の著者や創作者が、自分たちの研究活動についてお互いに、また世界の人々と情報共有するさまざまな方法を指す、包括的な用語のようなものである。

学術コミュニケーションは、ごく一般的には次のような形をとっている。」

##### 【列挙されたもの】

学術雑誌論文、単行書、研究報告、予稿（プレプリント）、白書、ポジションペーパー、会議論文および発表資料、ポスター、会議録、学位論文、データセット、マルチメディア作品、ブログ

#### (2) 目次

##### はじめに

##### 1章 定義と歴史

##### 2章 研究者とは何者か、なぜコミュニケーションするのか

##### 3章 学術コミュニケーション市場とはどのようなものか

##### 4章 学術出版とはなにか、どのように機能しているか

##### 5章 著作権の役割とはなにか

##### 6章 図書館の役割とはなにか

##### 7章 大学出版局の役割

##### 8章 グーグルブックスとハーティトラスト

##### 9章 自然科学（STEM）と人文社会科学（HSS）のニーズと実践

##### 10章 指標とオルトメトリクス

##### 11章 メタデータとその重要性

##### 12章 オープンアクセス：可能性と課題

##### 13章 学術コミュニケーションにおける問題および論議

##### 14章 学術コミュニケーションの将来

## 2. 学術コミュニケーションと図書館サービス（事例）

#### (1) RMIT University の Research サービス<sup>5)</sup>

「図書館研究サービスチーム（Library Research Service Team）は、学内のさまざまな研究科、学部、学際的分野の研究者や研究グループを支援しています。研究・執筆、オープンアクセスによる研究・出版、研究評価、研究のプロモーションを援助します。」

#### (2) 主なサービス内容

##### ・ 研究および執筆研修（Research and writing training）

- 自習型研修、ワークショップおよび発表会、カスタマイズ研修

- ・ オープンアクセスによる研究 (Open Access Research)
  - 研究データ計画、研究リポジトリ、研究のオープン化
- ・ 参照文献の取扱いおよび著作権 (Managing your references and copyright)
- ・ 学術コミュニケーションと関与 (Scholarly communication and engagement)
  - 戦略的な出版、研究者情報と ORCID ID、研究評価とオルトメトリクス、キャリアアップおよび研究助成獲得のための研究成果の紹介方法

### (3) 図書館の体制<sup>6)</sup>

- ・ Director Library Services
  - Learning Team
  - Teaching and Research Team
  - Quality Engagement Team
  - Collections Team
  - Library Services Team (Vietnam)

## 3. 学術コミュニケーションと研究活動

### 3.1 研究成果と研究対象

#### (1) 研究成果

##### a. 日本

『文部科学省における研究及び開発に関する評価指針』（2002年6月、2017年4月最終改定）<sup>7)</sup>

#### 第3章 機関や研究開発の特性に応じた配慮事項

##### 3.2.1.4 評価の際の留意点

##### 3.2.1.4.2 評価の方法

定量的指標による評価方法には限界があり、ピアレビューによる研究内容の質の面での評価を基本とする。その際、数量的な情報・データ等を評価指標として用いる場合には、前述(2.2.1.5.6 及び 2.2.2.5.2 評価の実施)に述べた観点を踏まえ、慎重な態度が求められる。

人文・社会科学の研究は、人類の精神文化や人類・社会に生起する諸々(もろもろ)の現象や問題を対象とし、これを解釈し、意味付けていくという特性を持った学問であり、個人の価値観が評価に反映される部分が多いという点に配慮する。人文・社会科学の研究の評価においては、例えば、「教養」の形成に資する著書、公開講座、メディア等を通じた様々な成果発信やアウトリーチ活動、漢学や日本学等における索引・目録の作成、日本語希少原典等の外国語への翻訳等、人文・社会科学の特性を踏まえた評価の項目等を充実させていくことが必要である。また、研究を通じた課題解決への貢献を一層推進するため、研究が社会とどのような結節点を持つのかという観点を踏まえて、社会的貢献・領域間連携・グローバル化を目指す研究を積極的に評価するとともに、プログラムの目的等に応じ、実務者との研究成果の普及に向けた協力等についても評価の視点として適切に取り入れられることが重要である。

## 本指針における用語・略称等について

### (11) 【アウトプット】

研究開発活動の成果物。例えば、投稿された学術論文、特許出願された発明、提出された規格原案、作成された設計図、開発されたプロトタイプ等。

### (12) 【アウトカム】

研究開発活動自体やその成果物（アウトプット）によって、その受け手に、研究開発活動実施者が意図する範囲でもたらされる効果・効用。科学コミュニティに生じる価値の内容（これらの指標として、目標等に応じて、例えば、論文の被引用数、テニユアポストを獲得した研究者の割合等が挙げられる）、製品やサービス等に係る社会・経済的に生み出される価値の内容（これらの指標として、目標等に応じて、例えば、新製品・サービスに基づく売上高、特許実施料収入、規格の標準化、第三者によるプロトタイプの利用等が挙げられる）等がある。

## b. オーストラリア

ERA (Excellence in Research for Australia) 2023<sup>8)</sup>

### 4.4 Research outputs<sup>9)</sup>

- ・ 従来型の研究成果 (traditional research outputs)
  - 査読付き論文
  - 研究図書
  - 研究図書の章
  - 査読付き会議論文
- ・ 非従来型の研究成果 (non-traditional research outputs)
  - オリジナルの創作物
  - 創作性のある実演
  - 記録・表現された創作物
  - 企画・開催した公的な展示やイベント
  - 外部機関からの依頼による研究報告
  - ポートフォリオ (一連の研究成果)

c. 英国

REF (Research Excellence Framework) 2021<sup>10)</sup>

Annex K: Output glossary and collection formats for REF2 and REF3<sup>11)</sup>

- ・ 図書（の一部）
  - A 著書
  - B 編著書
  - C 図書の章
  - R 学術版 (Scholarly edition)
- ・ 雑誌論文
  - D 雑誌論文
  - E 会議論文
  - U ワーキングペーパー
- ・ 有形の作品
  - L 作品
  - P 装置、製品
- ・ 展示、実演
  - M 展示
  - I 実演
- ・ その他のドキュメント
  - F 特許
  - J 楽曲
  - K デザイン
  - N 外部機関の依頼による研究報告
  - O 外部機関の依頼による機密報告
- ・ デジタル作品
  - G ソフトウェア
  - H ウェブサイトのコンテンツ
  - Q デジタルまたは視覚メディア
  - S 研究データセット、データベース
- ・ その他
  - V 翻訳
  - T その他

(2) 研究対象

資料、史料、人工物、自然物、現象、人…

### 3.2 学術コミュニケーションと研究活動を取り巻く環境の変化

#### (1) メディア

- ・ 情報通信技術の発達とインターネットの高速化、高機能化
- ・ 学術雑誌の電子化
- ・ オープンアクセス
- ・ オープンデータ
- ・ オープンサイエンス
- ・ デジタルライブラリ、デジタルアーカイブ

#### (2) 政策

- ・ オープンアクセス、オープンサイエンスを推進する研究支援（研究助成）
- ・ DX
- ・ 研究評価

### 4. 学術コミュニケーションにかかる最近の話題

#### 4.1 オープンアクセス

##### (1) 購読モデルからオープンアクセス出版モデルへの転換

- ・ 移行契約、転換契約（transformative agreements）<sup>12)</sup>
- ・ 国内の動き： JUSTICE<sup>13)14)</sup>、Oxford University Press<sup>15)</sup>、Elsevier、Wiley など

##### (2) オープンアクセスと格差問題

- ・ 「購読の壁」から「出版の壁」へ<sup>16)</sup>

#### 4.2 多様性

##### (1) 地域

- ・ ポストコロニアル時代のオープンアクセス<sup>17)</sup>
- ・ 図書館コレクションの多様性<sup>18)</sup>

##### (2) 国際共通言語としての英語

- ・ 日本語で学術雑誌を発行する意義<sup>19)20)</sup>
- ・ 「日本」を対象とする研究と研究成果発表

#### 4.3 デジタル化

- ・ デジタル技術がもたらすもの
- ・ デジタル技術でこぼれおちるもの
  - 角筆<sup>21)</sup>

#### 4.4 研究評価

- ・ 政策や研究評価指標が研究成果にもたらす影響<sup>22)23)</sup>

#### 4.5 ジェンダー

- ・ ジェンダー格差<sup>24)25)</sup>
- ・ ジェンダーと典拠<sup>26)</sup>

#### 5. まとめ

- ・ 学術コミュニケーションは研究活動の一部である。
- ・ 学術コミュニケーションは多様な要素から構成され、それぞれで求められる知識や技術は幅広い。
- ・ 学術コミュニケーションには多様な関係者が存在する。
- ・ 研究成果は多様である。
- ・ 研究活動は政策や社会情勢など、それを取り巻く環境から大きな影響を受ける。
- ・ これらを理解し、全体を俯瞰して、大学図書館サービスを開発する必要がある。

#### 引用文献

- 1) “学術情報流通”. 図書館情報学用語辞典. 第5版. 2013, <https://kotobank.jp/word/学術情報流通-2237038>, (参照 2022-06-16)
- 2) Association of College and Research Libraries. “Scholarly Communication Toolkit.” 2021-10-22, <https://acrl.libguides.com/scholcomm/toolkit>, (accessed 2022-06-16).
- 3) Scholarly Communication Toolkitは、ACRLが2003年に公表した次の定義を参照している。Association of College and Research Libraries. “Principles and Strategies for the Reform of Scholarly Communication I.” 2003, <https://www.ala.org/acrl/publications/whitepapers/principlesstrategies>, (accessed 2022-06-16).
- 4) Anderson, Rick. *Scholarly Communication: What Everyone Needs to Know*. Oxford University Press, 2018.
- 5) “Research.” RMIT University, <https://www.rmit.edu.au/library/research>, (accessed 2022-06-16).
- 6) “About the Library.” RMIT University, <https://www.rmit.edu.au/library/about-and-contacts/about-the-library>, (accessed 2022-06-16).
- 7) 文部科学大臣決定. “文部科学省における研究及び開発に関する評価指針”. 文部科学省, 2017-04-01, [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/science/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/05/02/1314492\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/02/1314492_1.pdf), (参照 2022-06-16).
- 8) “Excellence in Research for Australia.” Australian Research Council, 2021-06-16,



- <https://www.arc.gov.au/excellence-research-australia>, (accessed 2022-06-16).
- 9) “ERA 2023 Submission Guidelines.” Australian Research Council, 2022, <https://www.arc.gov.au/excellence-research-australia/era-2023>, (accessed 2022-06-16).
  - 10) “REF 2021.” Higher Education Funding Council for England, <https://ref.ac.uk/>, (accessed 2022-06-16).
  - 11) “Guidance on submissions.” Higher Education Funding Council for England, 2019, <https://ref.ac.uk/publications-and-reports/guidance-on-submissions-201901/>, (accessed 2022-06-16).
  - 12) 尾城孝一. 学術雑誌の転換契約をめぐる動向. カレントアウェアネス. 2020, 344, CA1977, p. 10-15. <https://current.ndl.go.jp/ca1977>, (参照 2022-06-16).
  - 13) 購読モデルから OA 出版モデルへの転換をめざして～JUSTICE の OA2020 ロードマップ. 大学図書館コンソーシアム連合. 2019-03-05, [https://contents.nii.ac.jp/sites/default/files/justice/2021-02/JUSTICE\\_OA2020roadmap-JP.pdf](https://contents.nii.ac.jp/sites/default/files/justice/2021-02/JUSTICE_OA2020roadmap-JP.pdf), (参照 2022-06-16).
  - 14) 玉川恵理. OA2020 ロードマップに基づく JUSTICE の OA 出版モデル交渉について. 薬学図書館. 2020, 65(4), p. 188-193.
  - 15) 次の文献を参照。岡本諒子. Cambridge University Press との Read & Publish 契約の開始. ふみくら : 早稲田大学図書館報. 2020, 98, p. 6-7, <http://hdl.handle.net/2065/00074203>, (参照 2022-06-16).; 藤本優子. 慶應義塾大学での Read & Publish 契約の導入と今後. Medianet. 2020, 27, p. 44-45, <https://www2.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/article/pdf/02700440.pdf>, (参照 2022-06-16).; 宮地佐保, 寺嶋梓. 大阪大学における「Read & Publish モデル」契約の事例報告. 大学図書館研究. 2021, 119, <https://doi.org/10.20722/jcul.2124>, (参照 2022-06-16).
  - 16) 前掲 12) で尾城氏が指摘している。例えば、次のような文献もある。Kowaltowski, Alicia et al. “The push for open access is making science less inclusive.” Times Higher Education. 2021-08-31, <https://www.timeshighereducation.com/opinion/push-open-access-making-science-less-inclusive>, (accessed 2022-06-16).
  - 17) Chan, Leslie et al. “Open Science Beyond Open Access: For and with communities. A step towards the decolonization of knowledge”, the Canadian Commission for UNESCO’s IdeaLab, Ottawa, Canada, July 2020, [https://unescochair-cbrsr.org/wp-content/uploads/2020/07/OS\\_For\\_and\\_With\\_Communities\\_EN.pdf](https://unescochair-cbrsr.org/wp-content/uploads/2020/07/OS_For_and_With_Communities_EN.pdf), (accessed 2022-06-16).
  - 18) Wilson, Kevin. “Decolonising Library Collections: Towards inclusive collections policies.” Decolonising LSE Collective. 2019-10-26, <https://decolonisinglse.wordpress.com/2019/10/26/decolonising-library-collections-towards-inclusive-collections-policies/>, (accessed 2022-06-16).

- 19) 特集, 「論文誌のこれからを考える」. 人工知能学会誌. 2022, 37(3), p. 312-362.
- 20) “「日本化学会誌」の『休刊』について（お知らせ）”. 日本化学会. 2001, <https://www.chemistry.or.jp/journals/nikka/nikka-kyukan.pdf>, (accessed 2022-06-16).
- 21) 白戸満喜子著, 芳井アキイラスト. 書医あづさの手控（クロニクル）：書誌学入門ノベル!. 文学通信, 2020.
- 22) 佐藤郁哉. “英国の研究評価事業：口に苦い良薬かフランケンシュタイン的怪物か?”. 50年目の「大学解体」20年後の大学再生：高等教育政策をめぐる知の貧困を越えて. 佐藤郁哉編著. 京都大学学術出版会, 2018, p. 223-306.
- 23) 特集, 研究評価と<本にすること>. 大学出版, 2020, 121, p. 1-27.
- 24) 藤波優. “論文の女性著者減少”. 朝日新聞. 2021年3月23日夕刊, 8面.
- 25) Kwon, Diana. The rise of citational justice: how scholars are making references fairer. Nature. 2022, 603, p. 568-571, <https://doi.org/10.1038/d41586-022-00793-1>, (accessed 2022-06-16).
- 26) 藤戸敬貴. E2405 - 学術論文における著者名表記の変更：主に性自認をめぐる. カレントアウェアネス-E. 2021, 416, <https://current.ndl.go.jp/e2405>, (参照 2022-06-16).